

④ 特別行事ではないがOBよりの寄付集めの為、各部門に担当OBが割りふられて、各自寄付集めに奔走した。

これらによりそれなりの収入は得たが、部の財務体質が好転した訳ではなかった。



当日の受付は女子部員の仕事でした。

左から梅本元子氏、平木茂子氏

(強化合宿)

① 主に新人部員を対象に、春季合宿を行った。場所は青学本校内馬場である。宿泊は、馬場の近くにあった柔道部の道場を夕刻以降借りて、貸し布団に包まって寝た。

② 夏季合宿は、鎌倉に於いてなされた。鎌倉の某乗馬倶楽部を予約し、合宿所は近くの光明寺の本堂でのごろ寝であった。参加者は、新城、中島、平木、梅本等々私を含めて計一二一三名に及んだ。この合宿は、左記の合宿計画を変更して行われたものである。

(附記) 本来の計画は、北海道にある国営・日高牧場で行くべく計画した。新城先輩と現地事前視察に行った。当時は東京・日高間は、車中泊を含めて片道三泊の汽車の旅であった。合宿先の仮予約等すべてが順調に出来たが、その費用を馬匹の購入に当てたなどの意見もあり、キャンセルする事となった。この費用が『青兎』購入の費用の一部になったと記憶する。この件、『いななき七号の私の談参照』

この旅で特筆せねばならぬ事は、札幌で古谷信治先輩(大15卒)にお会い出来た事である。お宅に呼ばれて晚餐をご馳走になり、その席で甥の方にもお会いした。北海道大学の馬術部員であった。当学と定期戦を結ぼうかとの話も弾み、翌日彼に連れられて北大の馬場を訪ねた。自然豊かな環境で羨ましく思った。

(学生馬術・関東選手選抜会)

関東選手選抜会に、中島と共に出場した。場所は宮城内のパレス乗馬倶楽部の大馬場で行こなわれた。抽選による貸与馬で、馬場馬術の基本技術を採点された。出場者は、六大学、東都大学等より各校二名が出場し、約三十名の中から六名選抜の競技であった。『鏡上げ大馬場数週』は、今でも強く記憶にある。結果は、両者残念であった。後に、当学より渡辺充(昭和33卒)が関東選手に選抜された事は真に朗報であった。

(昭和二八年度)

私はこの年度の途中で、馬術部での活動から離れた。(兼部による事情・後述(注))

従って、後を受け継いだ米谷浩二(昭30卒)等とその次の時代の東雄三郎(昭31卒)等に多大なる負担をかける事となった。負担をかけ序ではないが、二両者に生あるうちに二八年度以降三〇年度までの部活の歴史の『いななき』への投稿を強く願う。

因って、私はここで馬術部の部生活に関して筆を置く事とする。

(注) 我々の時代(新制大学第二期生、昭25年入・昭29年卒)とその前後の学年の運動部には部を掛け持つ部員が多々いた。運動部員の絶対数が足りなかったのである。

私は馬術部とアイスホッケー部、新城先輩もサッカー部との兼部であった。

当時アイスホッケー競技は人気スポーツの一つで、青学のアイスホッケーの昭和二七年度の戦績は、関東学生リーグ第二部第二位、全日本学生選手権(インカレ)は準々決勝まで勝ち上がった。二八年度は、関東リーグ一部への昇格を目指す事となり、その可能性は確実視されていた。部の顧問は大木金次郎先生であった。私はこの方針遂行に邁進する事とした。私の最大の問題点は、毎年、馬術の東都大学の秋のリーグ戦とアイスホッケーの関東学生リーグ第二部の日程が重なる事であっ

た。昼は馬術、夜はアイスホッケーの試合を二年間経験していた。

二八年度の結果は、関東学生リーグ第二部優勝、一部との入替え戦で一点差で破れた。以降四十数年後の三年前に一部に昇格、祝賀会に出席する事が出来た。

横浜生まれの私が何故アイスホッケーを？

それは、中学四年生→高校一年の時、我々の学年に満州帰り等の学生が転入してきた。私の隣の席には「大連・予科練」帰りの生徒が座った。彼が横浜のスケート場（彼は学業の傍ら、ここに勤めていた）でアイスホッケーを私に教えて呉れていた。高校時代から私は昼は馬術、夜はアイスホッケー、の生活も始まっていたともいえる。

そして青学へ入学後アイスホッケー部より勧誘され入部、同部には、野球部より(含・主将)二名とバスケットボール部部长、満州帰り部員三名そしてその他合計で約一二名が在籍していた。

(後記)

私は、生来の筆不精であつて今まで「いななき」に投稿していないことに気付いた。

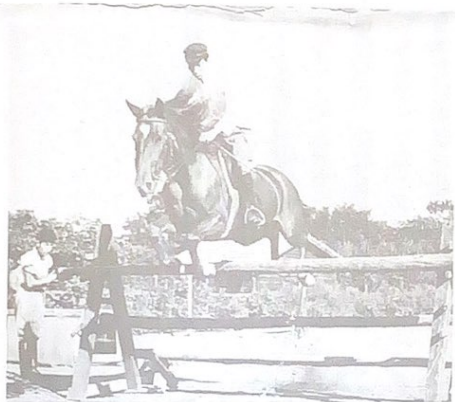
創部八〇周年に当り、新制大学一期生、二期生、三期生の当時の部活動の一端を、記憶を掘り起こしながら記した。それは、本年、平成一五年は昭和の年号に換算すると昭和七八年である。戦後の部が復活したその時代から数えると、早いもので

略、五〇周年になるのである。人生五〇年と言われてきた時代に生を受け、昨年古希を迎えた私にとっては感無量である。

戦後の馬術部復活に多大なるご尽力を賜った戦前・戦中のOB各位並びに戦後の部を夫々の時代に発展させてきた夫々の時代のOB・OG各位のご努力に深く感謝し、心より「八〇周年おめでとう御座います」と申し上げます。

「伝統を守る」とは、足る事を受け継ぎ足らざらん事を足らしめて更に発展を図る事と思う。現役の諸君には益々の精進を期待し、馬術部の更なる発展を祈ります。

完



堀内氏が現役時代に愛馬「青波号」に騎乗しての障害飛越の写真です。左に居るのは、村野吉昌氏（昭和31年卒）

馬術部80周年によせて

「現役そして緑鞍会に想うこと」

堅村 昭三

(昭和三十年卒)

麻布のアメリカンクラブにおいて創部70年記念祝賀会が催されてから早や10年、今日ここに記念すべき80周年を迎える事が出来ましたこと、誠に同慶の至りと存じます。思い起こせば私が大学馬術部へ入部し、初めて馬に接して以降緑鞍会会員としての今日まで共に歩んだ歳月は48年にもなり、改めてその絆の強さ感せずにはいられません。

私が入部した昭和30年頃は日本がようやく敗戦の痛みから抜け出して再び世界へ羽ばたく復興気運が盛りあがっているときでした。我が馬術部においても幾多の先輩方々のご尽力によって諸般の事情厳しい中で、いち早く馬術部を立派に再興されましたこと感謝にたえません。今日とは比べようのない窮乏時代の中でOBを始め部員共々気力に満ち溢れており新入部員の私はその活気に圧倒される思いでした。

ここ2、3年緑鞍会活動には雑事にかまけ失礼しておりましたところ、先日突然小生宅にOBの方々が大勢お見えになり、久しぶりに懐かしい人々たちとお会いする機会に恵まれました。殆どの方とは何十年ぶりの再会であり、又初めてお会いす

る方もおりましたが、時間差、違和感など全く感じることなく、瞬時に意気投合、夜の更けるのも忘れて楽しい時間を過ごす事ができました。これは正に馬を中心として同じ方向に向かい苦楽を共にした者同志が共有できる絆であり、伝統が育んだ貴重な財産である事を改めて痛感いたしました。



当日、堅村邸に押しかけたBB会と他のメンバーの皆さん

今日の社会に目を転じて見ますと伝統を否定又は破壊し、新しいものを築くことを良し、とする風潮が強く感じられますが、この紙面をお借りして差し出がましいことですが特に現役の方々にお話ししたいことは大学生活を通じて実社会が求める「優等生」を目指すことも大変重要ですが、あえて馬術部員には部活動を通じ「優等生」ではなく「優秀な人材」になることを目指して頂きたい。

く願っております。要するに「優等生」的頭脳、目、耳ではなく*クサイということを感じるとる喚覚、*これはウマイ話だと感じる味覚、*自分の靴の下で感じとって来る触覚、というものを部活動のなかで身につけた「五感人間」と言う「優秀な人材」に成長されることを期待しております。破壊と自己否定の試練を潜り抜けて変革ができる即ち「五感人間」を育むには、生き物を中心に現場重視の馬術部こそ亦とない格好な場所だと思っております。今後馬術部の九十年、百年へ向けて、この様な資質を身につけ且つ温故知新の心をもった若い力が欠かす事の出来ない要素となるからです。

さて、特にご依頼がありました「私の時代、想い出の馬匹」について、ですが昭和30年入部当時は「青姫」「青波」二頭と先輩の預託馬一頭の馬匹だったと記憶しております。



堅村氏騎乗の「青波」

預託馬は手入れのみで部員は乗れませんでしたが、二頭の馬を朝夕の練習と対外試合等で連日可愛そうなくらい酷使しましたが良く耐えてくれました。今思い

出しても頭が下がり決して忘れることのできない馬達です。在部四年間では他に青嵐、青幸、青影、青葉、青菊、等の馬匹がおりましたが、特に私の想い出にのこる馬は対外試合がある都度陸路を騎乗して運んだり、到着と同時にそのまま試合へ出場したりした青波があります。馬格の小さな牝馬で癖の有る気性の激しい馬でしたが、何となく私と相性がよく懐いてくれ又よく働いてくれました。卒業してすぐに悲しい別れもありましたが忘れる事の出来ない馬です。

更に想い出深い馬は青菊です。この馬は先輩の賀川昭彦氏（S23卒）が奈良のあやめが池でホテルを経営されていた昭和32年当時に所有されていたもので、ホテルを売却するにあたり母校の馬術部にと寄贈されたものであります。当時毎年関西遠征（名古屋、京都、神戸の各大学との定期戦）を実施していましたが、その帰路部に先輩と二人で奈良の賀川先輩宅を訪問有難く青菊を戴いたわけです。その場で試乗を仰せつかり乗ったところ部所有の馬と違いサラブレットの馬格の大きな馬でハンドウの高い牝馬でしたが日ごろ酷使している馬とは大違い性格がいたって素直で癖がないのに驚いた記憶があります。急には貨物列車の手配がつかず一度東京に戻り今は故人となつてしまった遠藤恭輝君（S35卒）に依頼して貨物列車に同乗して運んでもらいましたが途中水飼いは苦勞した話など今は遠い昔の事となりました。青

菊は一時青学に満点馬が入ったと評判になったりもしましたが、高齢であったため一瞬の名馬でもありません。当時一回大学対抗の「天狗会競馬」が馬事公苑で開催されており、青菊は優勝の前評判もたかく私も得意になって出場したものの全く走らず着外に終わり悔しい思いをしたものでした。以後日に日に衰えが目立ち生き物の哀れを感じたものです。氣立ての良さから部員のアイドルとして愛されたことが今でも心に焼き付いており想い出深い名馬です。

当時部員は中等部、高等部、短大、大学一部、二部で80人を超える世帯でしたが馬匹は多いときに四頭と少なく又馬場も新校舎建設で閉鎖され体育会の他部とのヤリクリで校庭を使用させてもらうと言う状況で大学側からの数々の制約や臭い、汚い、病気になる等のクレームも多く、そんな時に馬房の外に置いてあった寝蓐に何かの原因で火がつき燃え上がり、居合わせた部員で必死に消火、大事にならずに済みましたが驚いた馬が二頭校庭に放馬する騒ぎになり、その上大学からは廃部通達を受ける等サンサンな目にあつたときでした。

一時大学から支給される予算が減額され、当時の学生部長に何度となく足を運び面会をお願いして復活折衝にあたり、かなりの期間を経て認められた時の喜びは今でも忘れることができません。

当時の部の運営は部員の多い反面部費の滞納が多く会計係は大変な苦勞の連続でした。従って馬

糧の手当てもままならず一回分ごとに買いに行く事も度々でした。さゆり会で運営していた学食、「どんぐり」の遠藤のオバちゃんに頼み野菜くずを何時もとっておいてもらった事、有難さをあの時ほど身にしみて感じた事はありません。藁は瀬戸物屋さんから、野菜くずは八百屋さんから、おからは豆腐屋さんから、蕎麦湯は蕎麦屋さんから、戴く等、何でもあり、を経験したのも皆若かったあの時代でした。

時を経て部も大きく成長をとげ、多くの馬匹と部員を要し健在である現状を見るにつけ今昔の感一しお、感無量です。益々の馬術部の発展を願うことはもとより他部では出来ない経験ができるこの部に半年でも一年でも在籍した方達にフレキシブルに対応する一周り大きな緑鞆会として次の百年へ向け更なる発展を期する事を念じて止みません。記念すべきこの特集号への投稿にあたり、丁重なる進言を戴いた稲熊武臣君（S41卒）をはじめ発行にご尽力くださった方々に心から感謝も上げます。



青風号に騎乗する野村司。後ろの壁は、テニス部練習用の壁です。

もはや戦後ではない

(昭和二十九年〜三十六年)

岩崎 修

(昭和三十六年卒)

中学では、野球部で活動していたが野球は、ゴム球までと決めていた。高等部のオリエンテーションで「初心者でもオーケー」と聞き、馬術部に入部することにした。

昭和二十九年といえば、春日八郎の「お富さん」が大ヒット、映画も「七人の侍」が話題になった。アメリカ民主主義の影響でレディーファーストを強要？され、「もはや戦後ではない」と言われた世の中、少し余裕を持ち始めた頃だった。

馬房に行ってみると、馬は老練な「青姫」一頭。当時、大学の主将、東さんに初のコーチをしてもらうが乗ると言うより引き馬と跳び乗りばかりさせられた。馬を疲れさせず、人間を疲れさせるに



青姫号



青影号でスペイン常歩の練習をする岩崎 修氏。後方は、青波号の調教をする故阿部先生です。

は、当を得た練習方法だと感心した？問もなく「青翠」が入厩したが華奢でスタミナも無く、乗馬に適さないので一年も持たなかった。次に、栗毛、小柄だが動きの鋭い牝馬「青波」が入厩。難しい馬で泣かされた人が多かったと思う。私もその一人。翌年、「青嵐」と「青影」が入厩。「青嵐」は、あまり印象にない。「青影」は、目の綺麗な柔らかい動きをする鹿毛で人気があった。「青幸」は、期待されながら不幸にも破傷風で死亡させた。大学入学の年、昭和三十三年、漸く馬匹「青姫」「青波」「青嵐」「青影」そして、この年、コーチに迎えた阿部先生が調教された。馬の能力が低くて苦労されたと思う。この頃、馬房は、現在の記念館のところであり、隣は屋外プール、裏には荒廃した防空壕が一段下がったところにあった。馬場は、昭和二十九年に現ウエスレーホール附近に

あったが、翌年には引き払い、一般のグラウンド、いわゆる校庭でラグビー部と一緒に使った。地面は堅く、全く馬場には適していない。おまけに当時ラグビー部の部長・梅津教授からは、「馬糞臭い！」と言われ続けた。

(編集者注 当時の馬房の図面は、「昔の馬場」参照)

昭和三十五年、四年生のとき、網島グラウンドの一角に待望の馬場が完成した。(その間、数ヶ月、馬事公苑の外來馬房に一時仮住まいしていた)。しかし、当初の馬場は、田圃のように水が溜まり、練習の合間に石炭ガラや砂を青木真次先輩のお世話で調達し、敷きつめる作業を幾度となく行ったものだ。網島に入厩したのは、「青葉」「青光」「青麗」「月雪」そして、新馬の「青渚」「青剣」の六頭だったと記憶する。「青葉」は、頭を極端に下げて、一瞬首が無くなったかと思う跳びをしたが比較的良好な障害馬だった。「青光」は、水沢から買って来て、「ドタ」の愛称で見掛けは、ダサイが当時としては増しな跳びをしていた。「青麗」は、私が一番接した馬で非力ではあるが反動の柔らかい総合競技には適した馬だった。「月雪」は、関西学院から買い、障害は良く跳んだが嘔吐には悩まされた。「青渚」「青剣」は、資質を充分備えた馬という印象で、ここからの馬匹は他者に譲る。現在から見れば、全てに不足の時代ではあったが今となってみれば楽しい思い出

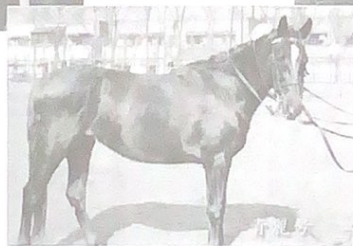
ある。この時代があればこそ、その後の人生を心豊かにしてくれた。ここに改めて当時の馬匹や仲間「ありがとう」と言いたい。



左から青葉号、そして関学から購入された月雪号



昭和35年に完成した念願の網島厩舎と馬場



青麗号

青渚との思い出

齋藤 良也

(昭和三十九年卒)

私は東海道新幹線の開業、そして東京オリンピックが開催された年の昭和三十九年(一九六四年)の大学卒業生(経済学部)です。おおよそ四十年前です。従って大学入学は昭和三十五年(一九六〇年)です。

当時は青山キャンパスしかなく馬房も校庭内にありました。馬場はなく運動場を馬場として使っていました。馬は青波、青麗など四頭でした。入部した時点で既に綱島の総合グラウンド内に馬場と厩舎が新設されることが決まっていました。

馬術部は今年、創部八十周年だそうです。現在もそうであると思いますが、歴史的にお金の面での苦勞が一番であると思います。

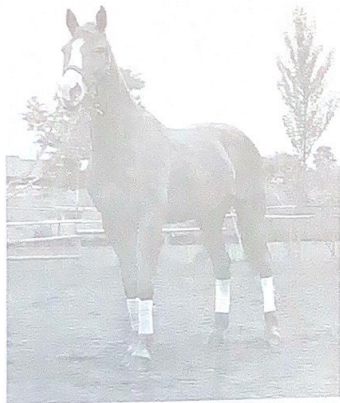
私たちの時代も同様で、東京競馬場、中山競馬場で競馬が開催される日は毎日交代でアルバイトに行きました。折角できる新馬場のために馬達の仲間を増やそうと上級生たちが考えた資金作りの案が、青山学院馬術部主催のダンスパーティーでした。

第一回目は大手町の産経ホールでした。入場券を関東の大学の体育会各部に依頼して売りまくるあの大きなホールでダンスが出来ないほどの入場

者数でした。入り口付近には応援団や柔道部の連中を用心棒として採め事が起こらないようにしたことを記憶しています。

この成功に味をしめ、第二回目はあの有名なプロレスラー力道山が造ったリキバレス(渋谷・今はない)でもダンスパーティーを開催し、資金が作られました。こうして得られたお金で二頭の馬を購入することが出来ました。青渚と青渚と名付けられました。

青渚の名前は当時アメリカ映画「渚にて」という映画が大評判だったので、それから頂いたものでした。北海道日高のうまれでした。大変ひょうきんな奴で六頭の仲間内ですぐに番長になりました。



青渚号

私は一年生の、その時から、馬匹担当となり四年間一緒に過ごしました。思い出は数限りなくありますが、写真(左頁上)は昭和三十七年の岡山国体の時の中障碍飛越に出場した時のものです。後

軀が強い馬でしたので東京都予選では六段飛越競技で優勝して出場したのです。岡山までの国鉄貨物車での輸送中、同行していた者がおにぎり等の濃厚飼料を与えてしまったため、脚が腫れてしまい、現地到着後は小川に入れて脚を冷やす毎日でした。

決して良い状態ではありませんでしたが、東京都は団体優勝し青渚もこれに貢献しました。恥ずかしい話を書きますが、私は臉の上を2度切り二回とも二針縫っています。

四肢をそのままにして彼の腹の下に入り前肢の治療をしていた際、ハエを追うため前肢を上げたのですが、私にとっては大きなパンチとなってしまったのでした。信頼関係がさせてしまった大失態でした。

恥ずかしい話をもう一つ、四年生の晩秋、当時は東京馬術大会が皇居内で開催されておりました。私と青渚は六段飛越競技に出場しました。もう役員も後輩に譲り、練習不足で騎座も甘くなっておりました。青渚は六段すべてを完璧に飛び終えました。だが次の瞬間とんでもないことが起きました。現在の天皇陛下の目の前で彼は着地と同時に左へ2mくらい飛びました。私はその位置で置いていかれ、地上に落下したのです。この光景をNHKが全国放送で中継しておりました、この無様な姿を故郷の親戚に見られてしまい後世の笑い者になりました。どうしてこんな事が起こった



岡山団体に於ける中障り飛越競技に出場し、東京都の団体優勝に貢献した青藤良也氏と愛馬青流号

かといえますと飛び終わった瞬間、皇宮警察のブラスバンドがタンバリンの轟音とともに鳴り響いたから驚いて飛び跳ねたからです。ゴールラインまで到達してないため失格でした。

紙面では書ききれないほど思い出があります。とにかく可愛い奴でした。

彼の晩年はあえて知りたいと思っております。

青武と雷神

那波 廣和

(昭和四一年卒)

今年、馬術部創部八十周年と聞き、正直驚きました。

私たちが現役の頃に作り上げた「いななき 七号 創部四十二周年記念号」からなんと四十年近くも立っていたという事実が、今更ながら時の流れの速さを痛感し、自分もそれだけ歳をとったのかと思ったりもし、何か感無量の思いです。

私と馬との最初の接点は、昭和三十二年頃に遡ります。当時中等部に通っていた私は、時々馬に乗った大学生が中等部の校庭近くへ出没してくるのを、驚きと羨望のままざしで眺めていたものでした。

そんなある日、同じクラスの菊池という男子生徒から誘われて、大学の厩舎へ案内されました。その時に出会ったのが「青波」という名前の馬でした。確か栗毛の綺麗な馬だったような記憶があります。今の記念館の前、当時はプールの脇の小屋に顔だけ覗かせていたのが妙に印象に強く残っています。

友人はその時既に入部しており、しきりに私に入部を勧めたものでした。当時親切に教えて頂い

た大学生の顔と名前は全く記憶にありませんが、ずっと後になって「堅村昭三先輩」だと判明しました。その時には、「朝の六時に来なさい」と言われてびっくりして入部しなかつたようです。その当時から朝には弱かつたのでしよう。

高等部ではサッカーに夢中となっていました。が、大学への内部進学試験に受かってから大学で入るクラブは「馬術部」と決めていました。おそらく、この時の印象が強烈だったのでしよう。まだ正式に大学生にもなっていない三月に入部しに網島の馬場を訪れ、卒業間近な鈴木宏先輩(当時、キャプテン)と山田芳通先輩にお会いし、晴れて馬術部々員となりました。

私が、一年生から二年生のはじめまで担当したのが「月雪」(愛称ユキ)でした。関学から購入された馬でしたが(関学の馬匹の名前は全て「月」が付いている)、当時OBに相談なく購入したという事で正式に「青」の名前が貰えずに最後まで関



練習、試合ともタフであった月雪号。
写真は、1年生の秋に行われた部内対抗での一コマ、右は同期の稲熊武臣氏。

学時代の名前のままでした。(その事実を知ったのはつい最近でした)尾花栗毛という変わった毛色に大流星の鼻を持ち、スマートではありませんでしたが、障害に向かうと小便を垂らしながら突進していくという貸与馬の競技では欠かせない、丈夫で長持ち派の馬でした。とにかく、嘔む、蹴るという大変な馬でしたが、晩年は寄る歳には勝てずついに出厩となり、馬場を出るときとグラウンドの正門を出るときに、関東に来て初めていなくなった声は、死ぬ瞬間まで看取った私の耳から暫く離れませんでした。又「月雪」というと先代の馬匹責任者であった石田謙三先輩(別称は、何故か二代目百姓、現福島在住)がすぐ目に浮かびます。

数々の悪癖の為に人気の無いユキを最後まで可愛がり、技術よりは人生哲学を教えるタイプで我々の代の良きアドバイザーでもありました。石田先輩とは卒業後もいろいろとお世話になりました。

続いて担当したのが「青武」です。京都競馬場から購入され、アラブ種の中でも優秀なニューバラッキーの子で、確かに出来の良い馬でした。

「青武」というと当時のキャプテンであった伊藤正昭先輩(故人)を思い出します。その伊藤先輩が騎乗した関東自馬戦での二日目のステイブル競技(別名、天狗大会)で腰を痛めたにも関わらず何事も無かったように最後まで完走した根性には、さすがニューバラッキーの血だと皆を感じさせました。



青武号にて馬場を馳む故伊藤正昭氏(当時主将)。青武と伊藤キャプテンのコンビは素晴らしい。

「青武」は、その時の怪我が原因で、その後は障害馬から馬場専門になりました。平木茂子コーチの調教で、サンジュルジュ賞典でも優勝した筈です。二年生のはじめに、病気で激しい運動が出来なくなった私は、平木コーチ、伊藤キャプテンと相談した結果、障害練習を止め、馬場馬術専門に変わりました。それが私の馬術人生を狂わした要因となつてきているようです。馬場馬術の面白さが分かつてきた為に寝ても覚めても馬術の事が頭から離れませんでした。更に私の祖父が当時馬術界の大御所と言われていた「遊佐幸平氏」と陸軍近衛騎兵隊で一緒だった縁で、氏から皇居内の主馬寮馬場で特別に教えて頂き、更には同じ縁で城戸先生や印南先生にも引き合わされた事が一層拍車を掛けたようです。授業はさぼって、馬漬けの

毎日でした。馬場に転向したお陰で「青武」や後に書く「雷神」といった優秀な馬場馬の担当になり、馬から教わったと言っても決して過言ではないでしょう。

もう一つ、この「青武」で思い出すのは、やはりアラブ種の「青扇」という小柄な雌馬です。「青武」は性格がおとなしいこともあって、去勢されておらず、馬房も「青扇」の隣にあり、日頃注意はしていたのですが、ある宿直の晩、この二頭が馬房にいないのがわかりました。人間風という「駆け落ち」をしたわけです。真っ黒な闇の中を懐中電灯を頼りに馬場や隣のラクビー場を探しましたが、見つかりませんでした。結局馬房のすぐ裏にいたのですが、見つけたときには、なんと○○○の真っ最中でした。暗闇の中に浮かぶ、重なり合った真っ黒い大きな影ですから、恐怖心が先にたつてしまい、近寄りたいたいものを感じて居ました。とっさに犬のケースを思い出し「水をかけろ!」と同僚に声を掛けたようですが、それが正しいやり方かどうか未だに不明です。どなたかご存じの方がいらしたら教えて下さい。

それからの数ヶ月というものは、「青扇」のお腹が膨れる度に、皆で「出来ちゃったか!」なんてことばかり心配していますが、結果は「水掛け」が効いたのか何もおきませんでした。

三年の途中から馬匹が「雷神」に代わりましたが、「雷神」は若手県水沢からやってきたトロッ



水沢から購入された雷神号（愛称デカ）、大型のトロッター系で貴重な馬でした。

ター種で、独特な速歩でした。この馬にも「青」が付いていませんが、私の記憶では、当時のキャプテン伊藤正昭氏が個人で購入したからだと言われているかもしれませんが真相は分かりません。

私の試合での思い出は、この「雷神」でした。四年生の秋（昭和四十年九月）に行われた第十六回関東学生自馬大会で、第一日目調教審査（新国際総合馬場馬術）で四位、二日目の耐久審査（全長4、500m、障害数27、高さ1.2m、幅2.5m）で完走、三日目余力審査（障害数14、高さ1.2m、幅4.4m）を五落下で完走し、出場69頭中17位という好成績を収め、全日本学生自馬大会への出場資格を獲得出来たことでした。しかし、その年行われた全日本学生自馬大会では、調教審査では六位と検討しましたが、二日目の耐久審査の疲れから

か、三日目の余力審査では途中失権でした。それから二年後に後輩の三谷稔君が、同じ関東学生自馬大会で見事優勝を果たしてくれました。この「雷神」（愛称デカ）といい先の「青武」（愛称タケ）と共に、気の優しい馬で、二頭とも女子部員の人気の的でした。特にデカは誰が教えたのか不明ですが「お手」をする馬でした。



昭和40年に行われた第16回関東学生自馬大会での閉会式の写真。この時の団体優勝校は早稲田大学で、優勝旗を持って進むのは早大安岡嘉彦主将（現日馬連理事）

最後に、二部馬術部の最初の自馬「青湧」にも触れておきたいと思います。現在は一部二部合併して、二部馬術部は発展的解消となりましたが、当時は二部馬術部として完全に分かれて活動していた時でした。私がたまたま学生生活を他人よりは長くしていた関係で、時間もありませんでした。当時二部キャプテンであった神谷亮司君の依頼でコーチと調教を引き受けることになりました。やはり二部の先輩である大塚義司君が「ライジング

ライト号」という馬を後輩達に寄付したことが二部の馬術部初の自馬となったわけです。

東横線綱島駅より更に先に妙蓮寺という駅があり、その駅から歩いて十分位の高台に二部馬術部の練習場と馬房がありました。そこには法政二高の馬術部も間借りしており、良く一緒に練習を見ました。その「青湧」（愛称ボーズ）は1m60の障害を楽々飛越する非常に優秀な馬でしたが、如何せん左前膝に古傷があって、疲れてくると痛み出すのか、膠着する癖がありました。

「青湧」の最初の試合は、確か神奈川県淵野辺の米軍キャンプ地で行われた「東日本馬術大会」でのバルクードシヤッス（小生騎乗）と六段飛越（大塚義司君騎乗）の二種目だったと思います。私は何とか完走出来たという記憶がありますが、六段は確か一回完飛だったと思います。その後は、キャプテンの神谷君と次のキャプテンの奈良君が念願の青学のマークを付けて、何かの自馬戦へ出場した筈です。二部馬術部員やOB会（旧緑蹄会）の自馬へ対する思いは非常に強く、自馬を育成するためには彼らが払った時間、お金、努力は大変なものでした。あの妙蓮寺から中央線武蔵小金井駅の近くにあった「サクラ乗馬クラブ」へ移転してからは疎遠になりましたが、その後三頭まで自馬を増やしたと風の便りに聞いて驚きと共に、自馬所持に対する思いに頭が下がりました。丁度昭和二十八年に馬術部が最初の自馬「青峰」を持った



我らが同期

- 中村 教雄
(青武馬)
- 篠原 敬明
(青駿馬)
- 谷中 基美
(青海馬)
- 青木紀久江
(青駿馬)
- 那波 廣和
(青神馬)
- 稲熊 武田
(青兵馬)
- 山田 恵道
(青海馬)

時と同じような気持ちだったのでしよう。

そんな二部馬術部も昭和四十七年に、一部と完全合併しことを「いななき10号 五十周年記念」で知り、一時期にせよ彼らと寝起きを共にした者として、何かホッとした気持ちになりました。

メインタイトルが八十年を彩る馬たちという事ですが、自馬を所持してから計算しますと、五十年という事になり、これも大きな年数です。この五十年の間、本青学馬術部を彩ってくれた馬たち全頭の冥福を祈って……

青 駒

(セイリユウ・愛称ゴン) のこと

山田 恵道

(昭和四一年卒)

私は高校一年生から三五歳になるまでの二十年の青春時代を馬の背に揺られて過ごした。その間、多くの方に指導を仰いだり、一番の師匠は平木茂子先輩であった。

昭和三九年の秋に、格安で馬が手に入ると言うことで篠原君と府中の競馬場まで行った。確か6歳の鹿毛馬を篠原は、馬相の古文書をひもときながら注意深く見た「耳は唐竹を切った如く……脚は濡れ岩に紙を貼った如く……」二人で慎重にチェックして買うこととした。



数日して馬運車で馬が到着した。馬場に降りたとたん大きな声でいななきだ。翌朝平木さんが馬を見て「あら山田君この馬、左の目に雲が掛かっているわ、まあ私は来年の春迄だから、勉強のつもりでアンタが調教したら」と、私と篠原がガツクリしたこと。

牡・牝拘わらず馬が近づくとすこぶる元気にいなくなり、馬欄は蹴飛ばすと言うことで、去勢する事となった。その年のクリスマススイヴは手術後の付き添いで馬事公苑の吹きさらしの寒い外厩でゴンと寝た。

年が明けて調教に取り掛かった。平木さんはチビの調教に忙しく、ゴンには偶にしか乗ってくれませんでした。そしてとうとう三月には京都に行かれました。

障碍飛越では左目が悪いせいか右へ逃避する事が多く困りました。でも私はこれをプラス思考し、右だけガードすればその方が楽だと思っ様になりました。網島の厩舎で日に日にゴンは素直になり、皆に好かれ、調教も順調に進みました。

昭和四十年十月十日オリンピック記念大会に馬事公苑デビューを満点で飾ることができました。本当に嬉しかった。

その後、後輩張君が埼玉国体出場を果たし、伊納君により昭和四五年の全日本大会の中障碍優勝の栄冠を勝ち得ました。そして数年後、日馬連から功勞馬として表彰を受けたと聞き及び、平木先

輩からのご指導をゴンを通して後輩に受け継ぐ橋渡しとなれたことを至上の誇りとしています。有り難うゴン……

青 駒

井上 敬一郎

(昭和六十年高等部卒)

一九七七年冬、網島の馬場で練習中、右前肢を骨折し退厩となりました。彼が骨折したという知らせを聞き、あわてて網島に行きました。いつも悠々とした態度をとっている青駒が、この時は痛みが弱々しく見えました。外はまだ寒いのに、痛みのためかじつと汗ばんでいました。退厩の朝、青駒は重たい体を三本の足で支え馬房から馬場にゆっくり向かいました。馬場の端に止めてあった馬運車の後ろで、馬場を一望するかのようになり立ち止まりあたりを見回しました。その後、決心したかのように三本の足で馬運車の急な坂を静かに登っていきました。最後まで堂々とした、まさに主将馬でした。その光景は今でも忘れることができます。

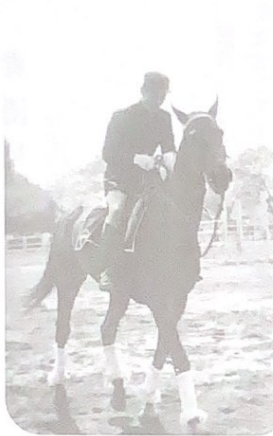
私事ではありますがその二週間後、日大の後藤博志監督から突然電話があり「小平の騎道苑というところに、セイリユウという馬がいるから今週末からその馬に乗せてもらうように」と告げられました。字は違うものの、馬の名前がセイリユウ(青龍)であったことに驚きと運命を感じ、大学時代は馬術部に在籍せず、もう一頭のセイリユウと4年間を過ごしました。



昭和41年3月、卒業を控え最後の騎乗



昭和40年春、新馬調教開始の頃



昭和四十年十月十日、オリンピック記念馬術大会に初出場満点でゴールの直後

私が高等部馬術部に入学した一九七五年。青山学院大学の馬術部の主将馬として、一際目をひいたのが黒鹿毛の驛馬、青駒でした。この馬は青森県森田牧場の種牡馬ヒカルメイジの産駒で、この時代の名馬として名高い日大のムネヒサ号の異母兄弟でした。何が原因でそうなったかは定かではありませんが、この馬は左目がつぶれた片目の馬でした。片目というハンディを持つものの、馬場、障害ともに非常に優秀な馬でした。私が入学する数年前、当時の主将であった板倉さんが全日本学生賞典障害飛越競技で優勝を納めたこともありました。今から考えると片目で障害を飛ぶということとは、とてつもない勇氣と、判断力のいることで、彼がもし両目でものをみることができていたらどれほど素晴らしい成績を残していたのだろうかと思像します。彼は非常に寡黙で敏感な馬でした。普段は非常におとなしく、常に何かを考えているように見えました。しかし、ひとたび機嫌を損なうと両後足でけつてくることもありました。馬房の中で手入れをしていて、胸の高さにまで足が飛んできたこともありました。私はそんな青駒が大好きでした。

青湧号

二部馬術部念願の自馬一号

神谷 亮司

(昭和四二年卒)

私が二部の馬術部(正式には自治会馬術部)に入部したのは、昭和三十八年です。その頃の練習は代々木にある東京乗馬倶楽部にて早朝に行われておりました。確か法政大二部の馬術部も同様に行われており、春秋には両校で定期戦を行っていたように記憶しています。

ところが昭和四十年冬頃だったと思いますが、東京乗馬倶楽部側から「今後は団体練習はお断りします!」と通告され、行き先が無くなってしまふという事態になりました。そこで法政大二部から「法政二高の練習場が東横線妙蓮寺にあるから、そこへ行かないか」という大変有り難い申し出があり、早速行くことになりました。

そこは、高台にある農家の空き地で、約百二十坪程度の練習場に二頭の練習馬がいました。その二頭を先客の法政二高と我々と法政二部で使用するという、我々にとっても馬たちにとっても過酷な状況となっていました。

そんな折、大塚義司先輩(昭和四一年卒)から「船橋競馬場に馬がいるから連れてこい!そして練習用に使え!」という話が来て、渡りに船と早

速引き取りに行きました。念願の自馬を手に入れることが出来たのです。

馬格は大きいとは言えませんでした。サラブレッド独自のスタイルの良い栗毛で、我々は「青湧号」と名付けました。二部馬術部始まって以来初の自馬でした。

連れて来たまでは良かったのですが、競馬を降りてきたばかりで全く練習にならず、そこで一部のOBであった那波先輩(昭和四一年卒)に調教とコーチとを併せてお願いしました。調教の甲斐があつて、馬場はA馬場、障害は中障害程度までクリア出来るようになりましたが、競馬時代に受けた傷が原因で疲労してくると膠着するという状態が直らず、試合に出て偶角で膠着されるという事もありました。

しかし、長年の夢であつた自馬が持てた事、そして自馬で関東学生自馬大会に出られた事など、卒業前の一年間は私にとっては大変充実した時期でした。



沙羅寺時代の青湧号

卒業後、二部馬術部も三頭の自馬を保持し、練習場も小金井のサクラ乗馬クラブへと移転をし、数年間継続した様ですが種々の面に於いて運営が難しくなり、昭和四七年体育会馬術部と合併という事になりました。

最初の自馬「青湧号」は、昭和四四年のオリンピック記念の六段飛越競技にて角南良彦君(S45年卒)が騎乗し、三、四回完飛し、誰もが優勝と思ったのが、ベル前スタートだったのでないかというクレームが付き、協議の結果二位ということになってしまいましたが、最も優秀な成績をあげてくれました。

晩年は東村山にある乗馬クラブへ移ったと聞いています。自馬二号は、農工大から購入した青駿です。その後に体育会馬術部から「青武」がやってきました。「青武」の晩年は福島の相馬馬追い行事を専門にしていた農家へ行き、そこで死んだと聞いています。更には「青闘」、「青鷹」と続き、合併の際に「青闘」のみを連れて行き、「青鷹」は村山乗馬クラブへと売却しました。(注 この項いななき10号新井良政氏文参照)

当然維持管理に必要な経費は部員の競馬場でのアルバイトで賄っており、それも段々と厳しくなつていったようでした。

体育会馬術部と自治会馬術部とが分かれて活動していた時期は、実際には十年間という短い期間だけで、それまでは練習場が校庭にあつた関係で、